

じょっぴんワード

教化の現場

1996年より推進された「帰敬式実践運動」は、2006年に「全ての教化事業に通底する基本施策」と位置付けられ、北海道教区ではハンドブック、リーフレットを作成しその周知に取り組んできた。「真宗門徒の自覚と実践を深め、寺院と門徒の本来的な繋がりが構築されることを願いとして」推進されている「帰敬式実践運動」を、一般寺院ではどのように受け止め、工夫されているのであろうか。

第16組好藏寺では、10年前から毎年御正忌に帰敬式を執行している。きっかけは同朋新聞の記事を見たご門徒から「お寺で帰敬式を開いてほしい」と相談されたことであった。帰敬式の執行にあたって特に意識されたのは、受式者がご自身の必然性として「真宗門徒」を選び取られた決断を、どのように具体化するかということである。そのため帰敬式の受式を希望する方は、「好藏寺同朋の会」の会員となることを条件とした。また、受式前には「同朋の会」主催による事前研修会を開催し、住職・講師の講義のみならず、推進員の方からの講義も盛り込んでいる。

「すでに帰敬式を受けたご門徒の方から直接声をかけられることが一番効果的です」と両瀬渉住職は語る。受式を呼びかけ、受式後のご門徒を受け入れる体制としての「同朋の会」が機能していることが、帰敬式実践運動推進の原動力となっている。

報恩講、御正忌など、ご門徒が集まる機会に執行される帰敬式がその後与える波及効果は大きい。実際に帰敬式を見ることは、お寺との関わりが薄いご門徒にとって大きな問いとなることだろう。一度帰敬式を執行した寺院の再執行率は極めて高い。このことから、帰敬式が「真宗門徒」の名のりの連鎖となって寺院教化の中心を担っていることがうかがわれる。

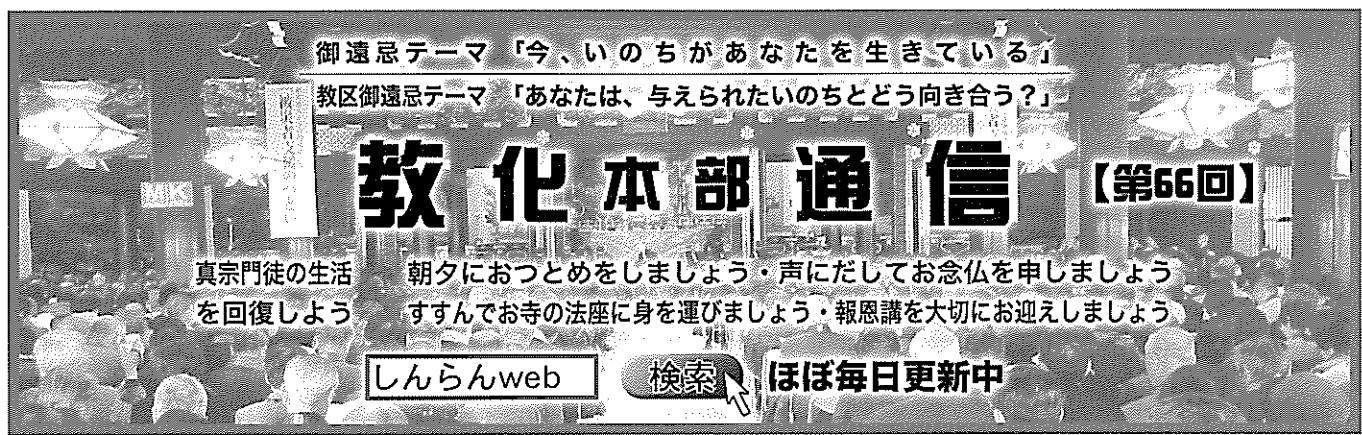


を教えているのかを聞き確かめていった、それが報恩講となつていく。「親鸞聖人の生涯が浄土真宗の生涯なのです、浄土真宗の生涯とは万人の生涯です、全人類の課題を背負って生きてこられたと言うことに他ならない、生涯の一つひとつが仏道なのであります」研修会で、ある先生からお聞かせ頂いたお言葉である。親鸞聖人の生涯を通して、インド、中国、日本の三国七高僧を通し、お釈迦さまの道教をして、相承血脈された、万人が真実とうなずかずにおれない「実語」に遇う、ここに蓮如上人が繰り返しいわれている「御仏事

としての報恩講」があるのであろう。宮城顕先生は著書の中で「報恩講というのは親鸞聖人の死を通して自分に贈られたもの、それを受け止めてきた人々の営みだったのでしよう。親鸞聖人の死というものを通して、つまりそういう命日を機縁として報恩講が営まれるということは、その死を通して親鸞聖人から贈られたものを受け止めてきたということであり、そういう人々の営みが報恩講であり報恩の営みだったのです」*⁽⁴⁾と、御命日が特別な意味をもつものであるとしてい

いた「二十五日の念仏」であるという。そこに集まった人々の多くは名もなき農民であったが、なかには武士や商人がおり、貴賤職業が問われない、念仏者は同行同朋であるという親鸞聖人の基本姿勢によつた平等な結びつきであった。*⁽²⁾

えを確かめ合いながら、お念仏を申し合わせた。*⁽³⁾ 親鸞聖人が亡くなられた後、御命日の「二十八日の念仏」と受け継がれ親鸞聖人の教えを確かめていった。後に第三代覚如上人によつて述べられた表白文「報恩講式」が御命日に拝読され報恩講となつたとされている。ここに親鸞聖人が法然上人の御命日という死を通して、すなわち死を通すということは、法然上人の生涯を通して、法然上人の教えを聞いていかれたことと同じように、親鸞聖人の御命日において、その生涯がこの私に何を語り、何



真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 再出発(二)

教化本部 古卿 誠幸

真宗大谷派なる教団は報恩講を中心と今日まで相続してきたといえる。それはまた「報恩講は、宗派存立の原型ともいうべきものであります。親鸞聖人において、みずからの依るべき教法に遇うことをえた人々が、聖人を宗祖と仰ぎ、その報恩のまことをもって、共にその道を歩まんとする人々の集まりとしてこの宗派はあります。それ故に、報恩講は、たんに宗派としての諸行事のなかのひとつというものでないことはもちろん、そのなかのもっとも大事な行事というものでもありません。逆に、宗派そのものを生み出した『大谷派なる精神』そのものの発露の場であり、出会いの場であります」*⁽¹⁾と1979年(昭和54)、教団問題を背景として厳修された本山御正忌報恩講問題について討議すべく開かれた「同朋会運動に聞く集い」(衆念)での記録「真宗教学の使命」の中に明記してある。

親鸞聖人が如来の本願に遇い、真実の自己に遇いえた尊い意味を持つ善知識として法然上人に出会い、そして、親鸞聖人は生涯通して法然上人を我が師として生きぬかれた。その親鸞聖人の名のもとにおいて縁ある者がそれぞれの道場に集まり、当時すでに親鸞聖人から与えられていた「帰命尽十方無碍光如来」の十字名号を御本尊として、法然上人の「ただ念仏のみぞまこと」このことひとつを明らかにすることを願ひ続け、「我首きらるとも此事ははずばあるべからず」という「お念仏を我いのち」とした教

う事なのであり、それは真宗が真宗でなくなつていくということではないだろうか。報恩講教団として出発した真宗大谷派なる教団であるならば、宗祖の御命日に必ず法座を開設し、宗祖の教えを確かめ合つていくという宗風を再び現代に取り戻していくところに、真宗同朋会運動の再出発があるのでないだろうか。*⁽¹⁾「教化研究」87号 特集 同朋会運動の願ひに聞く

宗祖の教えに集う御同朋によって御命日の集いが営まれ、報恩講が勤められている。

*⁽²⁾ 『真宗史料集成』参照
*⁽³⁾ 『御仏事としての報恩講』竹中智秀著参照
*⁽⁴⁾ 『死からの問いかけ』宮城 顕著